

文化高知

'97年9月 NO.79



「秋の野原」高橋鴻二

かわらそ 瀬のごとなど

橋田憲明

日本のトキは、のこされた卵のふ化が不可能と分かりついに絶滅した。

昨年五月のことである。ニホンカワウソの生きた姿が確認されたのは、須崎市の新莊川が最後で十七年前の夏であった。

昨年、人とカワウソの共存をテーマに高知市で日韓カワウソ・シンポジウムが開かれていた。

そんな折しも拝見した安岡紀容（野市在住）さん所有の若尾瀾水短冊の句が、

瀬の魚食みぬるや萩の月 瀾水

であった。月光の照る萩叢の中で、捕えたばかりのえものを前足ではさんで食みつづけている。そんなに古くない時代、そこから出合う普通の景色であったろう。

以前見出した浜田波静の句にも

瀬に夜ぶりの獲物とられけり

波静

があった。夜、松明やカンテラなどをともして川魚をとった。それを夜振という。人間様が小動物にしてやられる滑稽の味わいが深い。

九月十九日、正岡子規の忌日を、糸瓜忌・瀬祭忌ともいう。糸瓜忌は

糸瓜咲て瘦のつまりし仏かな

他の絶筆の句からきている。瀬祭忌は、子規が俳論などのときに使ったペンネーム、瀬祭書屋主人から出ている。

カワウソにその名が由来するのである。カワウソは夜、魚や貝などをよく捕えるが、まず獲物を岸に並べてなかなか食べない。それが祭の供えものをしてるようにみえるとい

うので瀬祭の語が生まれた。中国の「礼記」月令に「孟春之月（正月）、瀬魚を祭る」とみえ、さらに瀬祭は、陰暦七十二候の一つ。すなわち、二十四節季でいう正月中雨水の初候、新暦二月十九日から二十三日頃に当たる。早春二月の季節であった。

子規は、ものを書くとき、傍らに多くの本を取り散らかす。その姿を獲物を並べるカワウソになぞらえ、瀬祭書屋主人と号するようになった。

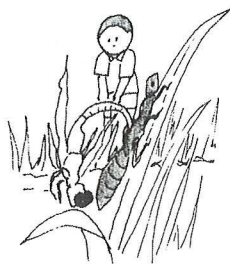
瀬の祭も過ぎぬ臘月 子規

茶器どもと瀬の祭の並べ方 同

などの句もある。

子規もカワウソへの思い入れが深かった。子規と同時代に生きた二人の郷土俳人に、それぞれカワウソの句を見出したこともうれしかった。当時カワウソは人の身近にあった。それはカワウソに食と住みかを保障できるだけ、自然が健康であったということであろう。

カワウソはその後、姿をみせない。カワウソだけではない。絶滅が心配されている動植物はおびただしい数に及ぶ。明治の俳人たちに詠まれたカワウソの時から百年ほどの歳月が流れた。現代の地球環境の変化はさらに急速に進んでいる。かつて百年間に失ったものをここ数年のうちに失っていく勢いである。ひとりひと



りが自然の変化にもっと敏感になって環境を破壊から守るとりていかなければ手おくれになってしまふ。自然を守ることは人間を守ることと同じなのである。

追記

高知県立文学館は十一月に開館します。常設展では紀貫之から宮尾登美子まで、土佐の生んだ重厚で多彩な作家を紹介することになります。俳人では若尾瀾水と浜田波静をとりあげます。瀾水の「瀬の：」の短冊も安岡さんの御理解を得て展示させていただきます。

文学館は、県民に開かれた、生涯親しんでいただける館をめざし、今、多くの方々のご協力をいただきます。ご支援をお願いいたします。

（はしだのりあき・高知
県立文学館館長）

博多の夏も暑い、学校の休みのあいだ中、毎日のように、物部川で泳いだり魚とりをして遊びほうけた土佐の夏は、もっと暑くて長かった。

緻密で辛抱づよい思索を身上とする哲学は、暑い南国育ちには不向きらしい。十三年まえドイツに長期滞在

したが、歴史にのこる哲学者の数ではトップのそのドイツはヨーロッパ北方の、暗くて寒い森の国であった。それよりもまた十数年まえ、東北の山形で七年間、教鞭をとったことがある。長い冬を雪にとざされる灰色

のこの北国も、戦前、高名な哲学者を輩出した県である。それにひきかえ、昔「南学」というものがあつた土佐の高知の、ルソウの紹介者中江兆民以降の現役の哲学はと尋ねられたら、残念だが、南国市出身で神戸大教授を務められたヘーゲル学者の故武市健人先生の尊名をおもいだすのが関の山か。手もとの一九九〇年

版『高知年鑑』をあたってみても、中村市出身で高知大教授の亀岡俊治氏、高知市出身で同じく高知大教授の杉村暢一氏のほかに哲学関係として記載されているのは、かく申す野市町生まれで物部川育ちの小生だけのようである。ただし、本山町出身で東北大教授の宮田光雄という先生は、所属は法学部ながら、『政治と宗教倫理』『平和の思想史的研究』

『西ドイツの精神構造』などという本を書いておられるから、ひよっとしたら哲学に傾いておられるかもしれない。

今回、なにか書いてみよとのご依頼であるが、それほど不向きな気候

物部川と 高知空港

山崎庸佑

風土にもかわらず、どこでどう間違つて、私のような鈍才が哲学の道にいまもって難渋しつづける羽目になつたか、その次第をのべて責めをふさぎたい。幸い、山形大学時代の同僚で酒のうへの先輩でもある堀勇

田舎育ちのその学者の語るところによると、子供のときにはわんぱくで手がつけられず、勉強の方は怠け放題であったが、中学生のときに、そのわんぱくがすぎ、けがしたりし続けて、しばらくの間、松葉づえにす

がらないと歩けない目にあつた。そのとき、さすがのわんぱく坊主も、おれの将来はどうなるのだろう、まともな嫁さんもらえまいと、深刻な不安に襲われて、以来東大入試を目指してガムシヤラに勉強し出したのだという話であつた（『少年の心世相を読む』芸林書房 一二八頁以下）。

これは私の酒のみ話を堀氏が書きとめたもので、一年近く松葉杖をついたのは、たまたま校庭にだしてあつた高い跳び箱を不用意に跳んでみたが、足が地面にドスンと着いた拍子に踵の骨にひびがはいたためである。しかし、「物部川と高知空港」という題で書きたかつたは、そんな話ではない。小学低学年のころ作りはじめた物部川対岸の予科練の飛行場（現高知空港）ができたため、戦争末期には米軍艦載機が落とす爆弾におののくまだ十歳にならぬ少年といえども、子供ごころに「死」をおもい、「私」を尋ねることがないわけではなかつた。その子供のおもいこそ、私の哲学の文字とおりの遠因であつたらしいことを言いたかつたが、紙数も尽きたので、それについては朝日新聞社のムック『哲学がわかる』をご覧いただくようお願いして筆を擱く。

（やまさきようすけ・九州大学教授）

奥深く、おもしろいテーマ 海洋深層水

谷口道子

太平洋の水深は五、〇〇〇から六、〇〇〇メートルあり、そこに湛えられている海水は、大まかな分類で表海水、中深海水、漸深海水、深海水と四種類の起源と性質を異にする海水が層状に重なっています。そして、それぞれが別々に一定の方向に流れています。室戸岬の東側の海底は急峻な階段状になっており、沖合へ二キロメートルぐらいい進むと水深二〇〇メートルから一気に一、〇〇〇メートルへと崖のように深くなっています。水深五〇〇から一、〇〇〇メートル層には北太平洋中層流と呼ばれる流れが南から北へ向かって流れています。この流れが室戸岬東側の海底の崖につきあたり表層へと上昇しています。このように深い部分から表層へ湧昇してくる海水のことを深層水と呼んでいます。この湧昇流の強さを物語るエピソードがあります。昨年の夏のことで、深海の調査をするために様々な観測機械や通信ケーブルが室戸岬東側の海底へ海岸から沖へ向かって設置されました。これらの設置状況を観察するため、潜水ロボットが運航されたのですが、上述の崖のところまで来ると、湧昇流が強くてそれ以上ロボットを深みへ潜らせることが出来なかつたそうです。昔から室戸岬の東側は湧昇流が良く発達するところとさ

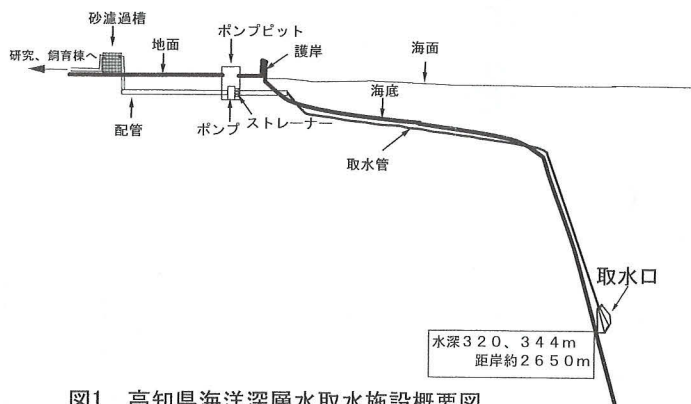


図1 高知県海洋深層水取水施設概要図

れており、その恩恵でいるいるな魚がよく集まる好漁場なのだと言われてきました。その通りであったということですが、

高知県海洋深層水研究所では、図1に示すように、長さ二、六五〇メートルのパイプ2本を海底に固定、埋設し、上述の崖の途中（水深三二〇メートルと水深三四〇メートル）からこの深層水を連続的に陸上へ汲み上げ、さまざまな研究を行っています。この図からも解るように、海

洋深層水はまさに海水です。ただの海水と言ってもよいかもしれませんが、しかし、この海水を汲み上げ、研究するにつれ、私たちが慣れ親しんでいる海水、表層の海水とはかなり違う、特徴ある海水であることが解ってきました。室戸岬海洋深層水の物質は、水温九度、塩分三四・三%、容存酸素四・四ppm、pH七・八前後で周年安定しており、無機栄養塩類は表層水の約五から一〇倍の濃さであること等が明らかにされています。微生物学的にも非常にきれいであり、人間生活と関わりのある一般細菌や大腸菌、食中毒菌などは検出されません。もちろん海は生きていますので、海洋深層水も無菌ではありません。海水に本来存在する海洋性細菌は表面の海水よりは少ないものの、存在して、様々な働きをしています。濁りの元となる懸濁物質も非常に少なく、海洋深層水から作った塩は真っ白です。海洋深層水に関する研究は水産、医薬、化粧品、食品、冷熱利用、園芸等まで非常に幅広い分野へ展開されています。その利用実績の中から新たな知見が得られつつあります。たとえば、発酵食品分野

では酵母が元気になる、発酵が終了した後も酵母が死滅しない、水産分野では生物を飼育しやすい、食品分野では素材の持ち味を引き出すことができる、減塩でしっかり味がつく、抱え込みが良い、美容分野では肌がしっとりして乾燥しにくい等々です。なぜ、どうしてそのような現象が生じるのでしょうか。それを解明する

事が、研究者の仕事であるわけですが、なかなか奥が深そうで、現代の最先端技術を駆使して解明する必要があります。というのも表層水と深層水についてそれぞれの成分毎にばらばらに測定すると微少な差が認められるものの大極的には大きな差異はないという結果が出ています。しかし、実際に使ってみると大きな

の暮らしのとって欠かせないものです。海水は、潮、塩に通じます。減塩運動の結果か塩を敬遠する風潮もありますが、塩は命の源です。海水から天然塩、食塩へと製造技術が高度化されるにつれて塩が本来持っている大切なものを置き忘れてきたのかもしれない。つい三十年ほど前までは、海水で魚を煮たり、漬物を漬けたりする食習慣が浜の暮らしの中に残っていました。浜に打ち上げられた海藻を肥料に使ったりもしていました。海



高知県海洋深層水研究所の施設全景



深層水を利用して製品化された食品類等

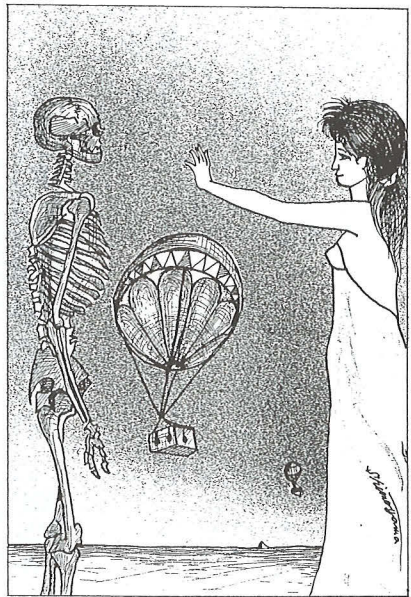
差が出ますし、汲みだたの表層水と深層水を口に含んでみると味も確かに違います。表層水は雨や川の水が混ざり、波にもまれ、動植物プランクトンが生滅を繰り返している変化の激しい海水であるのに対し、深層水は水圧三十気圧以上で長い年月をかけて熟成された海水であります。このことがこのような違いを生じているのかもしれない。母なる海という言葉がありますが、海の水すべてを解明するにはまだまだ時間がかかりそうです。さて、海水は人々

が汚され、暮らしが近代化するにつれ、本来密接であったはずの海と人との関わりが次第に疎遠になってきたと言えるでしょう。いくら海水に含まれる微量元素が体によいといわれても、眼前に打ち寄せる海水を波で、料理に使うことにはかなりの抵抗があるでしょう。その切り離されてしまった関係を海洋深層水が再び取り戻させてくれるのではないで

しょうか。塩も大切ですが結晶にする以前の潮、すなわち液体塩の良さが再確認されつつあります。海から生まれてきたとされる人類と海水との関係の大切さが新しい科学によって再発見され、新しい技術によって生かされる日が近い将来やって来るでしょう。（たにぐちみちこ・高知県海洋深層水研究所長）

芸術はすべての 学問の頂点にある

下山 郁夫



カット・筆者

「こんにちは、先生ですか。この子は何も出来ないで、せめて絵の方に進めたいと思って伺いました。勉強嫌いで成績も良くないんですが、どうかよろしく願います」、私の仕事はこのような話から始まる。しかもそれは、いつも決まって高校三年時の秋も深まった頃というおまけつきなのだ。絵を描くということ、一般の方には、学問というよりもむしろ遊びと映るのかも知れない。何も出来ないで絵でも、という感じなのでしょう。

「文化は人づくり」に他ならないのだが、とかく芸術に関することになれば、行政は積極的に立ち入らない。文化は金のかかるやっかいな代物であり、目に見える効果の期待できない、形になりにくい事業なのだ。

だろう。高知の芸術文化を考えるにあたって、それを支える底辺のなさが危惧されます。

おっと話が少しそれてしまった。若者たちはいつの時代も同じであろうが、「自分はここにいます……ここぞ……」という叫びのようなものを持っている。自分自身の存在感を固持したいのである。ところが現代は、多様な社会情勢の中であつて、何でも手に入るかわりにかえって自分自身を見つけない時代となっている。私も訪ねてくる学生は、目に力なく輝きもあまり感じられません。日々の生活の中で目標を見つげだせず、夢もなく、速い時間の流れに翻弄されているのです。

日本では、どの家庭にも必ずある

日常不可欠なものとしてのカレンダ―、いずれも美しい風景や国宝クラスの陶器が、素晴らしい印刷技術とあいまって、インテリアとして壁に納まっている。それはそれなりに評価出来るはずなのだが、どこか違和感を感じてしまう。その機能性はさておき、何やら心豊かなものではない。そのものからはそれ以上のものを感じとれない不思議な光景である。

え、そして成熟させる。そのようなことが自然の中でゆったりと行われるのである。そして、そこには家族一人一人の、飾らない顔があり、その時の写真を基に、家族で話し合いながらタブロー（油絵）として残すのである。そこには国宝級の壺もなく、高名な写真家の手による美しい山々もない。

一方、欧米では家庭の中に絵画を自然な形で取り入れている。例えば、ヨーロッパでは家族で一年に一度は旅行を楽しむ。いわゆるバカンスであるが、思い出をつくるというのではなく、この家族旅行で家族一人一人が人生を楽しみ、また楽しい人生を見つける。日常のざくざくとした部分を癒し、冷静に考

油絵は通常、人間と同じように成熟する。描かれた人々や景色もまた、家族の中で呼吸しているのである。絵画や文化がそのまま家庭の中で息づいている。日本との違いがここにある。私たち日本人は、芸術とか文化という言葉、ある種、特別なものとして考えている節がある。しかし欧米では、日本のように特別なものではないのである。



「自分の作品」を展示・発表する TOSA・美術アカデミーの学生たち

明治の初め、日本は、文明開花の名の下に欧米文化を性急に導入しようとした。その結果、制度や法律等形あるものだけを模倣し、それらが生まれ出てきた文化的歴史的背景までには立ち至らなかつた。つまり、西洋の器だけを取り入れ中身を生かすことが出来ないまま、「文化」に対する考え方が定着した感がある。明治以前、日本の国には独自の素晴らしい文化、芸術があつた。それらは、欧米文化の激しい流入の中で脇に押し寄せられ生かされきれないでいる。どちらにも目が届いている反面、どちらをも本質的に生かされきれない中身のさむいものとなっている。

学生達は大学に入ることしか考えない、当然その後のことはないのである。必要最少限の努力で、最大の効果を期待している。決して悪いとはいえないが、そのようなところから美に対する意識を感じとっていくことは非常に難しいのである。インスタントな時代に、流れに逆らつた考え方を求めるのは、自分自身の反省も含めて難しい、しかし努力はすべきだと思ふし、そうあつてほしいとも思う。

「先生、うちの子大丈夫ですよ」と真顔で話す母親に、「お母さん、お嬢さんは、家事手伝いをしますか」

と尋ねると、「とんでもない、そんなことをさせよつたら浪人するじゃないですか、一切させません」と親の責任のようなものを楯にたたみかけてくるのを、「そのようなことをしていたら本当に浪人しますよ」と言うことにしている。

身近なこと、例えば食器を洗う、野菜やくだものを切る、そのような日常の中に物の本質のような部分があることに私たちは気付かない。図鑑で習った、教わつたものと自身で確かめ感ずることでは、人間にとって大きな差異があるはずだ。ほとんどの場合、芸術は習うもの、専門的知識のある者から指導されるものと考えがちだが、それは過去の伝承でしかない、言わばすでに出来上がった結果だけを手に入れることで、創造性もなくつまらないものとなってしまう。ちょうど日本のカレンダ―と欧米家庭に飾られている作品との差のようなものであろうか。

素晴らしい東洋的な美意識が生活の中で生かされてきた時代を、もう一度取り戻すような指導が出来たならこの世界でやってきた証しにもなるのだが……。「芸術はすべての学問の頂点にある」という先人の言葉は、あまりにも重く歯がたたない。

（しもやまいくお・TOSA・美術アカデミー主宰）

ウルマー・シュパッツェン交流コンサートを終えて

—ドイツウルム市からのジュニア合唱団と県下の高校生との交流—

高坂優子



ウルマー・シュパッツェン（ウルムのすずめ）の見事な合唱〔追手前高校芸術ホール〕

日独の少女達が十人を残し、舞台から降り立ち、客席の周囲に立った。シュテーターガーさんの手が動いた。一瞬、会場に美しいカノンが響いた。力強く透明で清々しく美しくかった。指揮者夫人タマラさんの目が潤み、杉本暁史さんが私の方を向いて微笑んだ。来場者への感謝と祝福も込められた歌声に包まれてコンサートは終わった。

それは、私の予想していなかった終わり方であった。日本とドイツの百人の少女達（正確には一人の少年と九十九人の少女達）による明るく楽しげな歌声は、前夜の交流会で心を通わせ、日独の壁を取り払って音楽を享受した様子をそのまま舞台上に持ってきたようであった。

客席には、前日の子供達の交流を目の当りにしたホストファミリーの姿も多く見られ、会場外の台風影響下の風雨からは想像できないような温かい雰囲気が出ていた。団長のウーリッヒさんと握手を交わしながら心の底から感激していた。歌声が余韻となって残っていた。

私の予想を超えた終わりの印象深さは、日独のティーンエイジャー達の持つ感性とエネルギーが創り出したものだった。

一九九五年四月に計画していた日



ウルマー・シュパッツェン（ウルムのすずめ）と土佐女子中学・高校コーラス部との共演

独青少年吹奏楽交流コンサートは、残念なことに、阪神大震災とオウム真理教事件の影響で、一年延期となったが、学校行事の多忙時期と重なり、協力校の了解が得られず、高知では中止となった。引き受けをした伊予土居町へ出かけ、楽しい交流ぶりを見た時、いつかこういつた体験を高知の高校生にも味わってもらいたいと心に決めていた。

昨年の四月に、今回のシュパッツェン来高の話があった時、「よさこい祭り」直前で迷ったが、一番南国土佐らしい時期と思い、決心した。中止したら何も残らないが、実現したら沢山の心の財産が残ると思ったからだ。



交流会閉会間際の記念撮影

日本は国際交流途上国という。本当にその通りの姿が今回見られた。

出迎えの高知駅で、握手しようと張り切っていた写真部の少年は、ドヤドヤと大きな荷物を持って改札口を出てきた少女達を見て、「恐いよー！」と、後退りした。

十二歳から二十一歳までの彼女達は、何度も、様々な国に演奏旅行に出かけている。昨年は、アメリカと聞いた。今回も十七日間の滞在中、九回の演奏会をするし、ホームステイも重ねている。歌だけでなく精神的に鍛えられている。自立しているから迫力が違う。

下駄で注目を浴びようとして無視され、荷物運びを手伝おうとして置き引きと間違われて蹴飛ばされて、交流会開始直前まで無然としていた実行委員会ジュニアのリーダー格笹岡君は、しかし、最後のダンスで、ドイツの少女達と時間を忘れて踊っていた。

閉会間際、記念撮影のカメラを構えた写真部員三人は、大勢の輪の中に入りたくて、私達にカメラを預け仲間の許に走った。ファインダーの中には、湧き出したとしか言いようのない国境を越えた一つの輝く塊があった。

不思議なことに、この写真の中に



交流会での県下高校生との歓談風景

は大人がいない。二百人を越えた参加者の中には大勢の大人もいたが、大人達は、この若いエネルギーに圧倒されていた。一対一の交流ではできない若者集団の交流のダイナミックさがそこにあった。そしてコンサート成功は、この交流会から生まれてきたのだ。

……みんなが歌おうメロディー
……みんなの心に響く……
……

（「ジャダ」より）

何度 この曲を歌い踊っただろう。
……
いつの時から いつの日か
やがて来るであろう日に
人々が尊厳を持って生きる時
その時こそ

私達は 自由になる
人々が 私達の歌によって
きずなで結ばれ
共にハーモニーをかなでる時
その時こそ
私達は 自由になる

（平和賛歌「自由賛歌」）

手を取り合って歌っていた合同曲を拙訳しながら、「文化を育てない」と心が荒れる。それが市の荒廃につながる。」とした十萬都市ウルムの文化行政の話を思い出した。凶悪な事件が日本でも増えてきた今、この言葉は重い。そしてこの事は大人の責任でもある。ウルム市の見識が、レベルの高い市の合唱団を創り出し、優れた指導者の力を発揮させ、手厚い援助が海外公演を可能にさせた。

今回、協力校は五校、十一のサークルと有志のボランティア六十人余りと多くの教師、保護者に支えられ、コンサート当日も五百人の人々の来場があった。実行委員会と準備の中では沢山の生き生きとした高校生の姿があった。きつと授業とは一味違った達成感、充実感をそれぞれの学校に持ち帰っていくと思う。そう、この感じが、地球人としての最初の一歩なのだ。

（たかさかゆうこ・ウルマー・シュパッツェン実行委員会代表）

動物たちの子育て ①



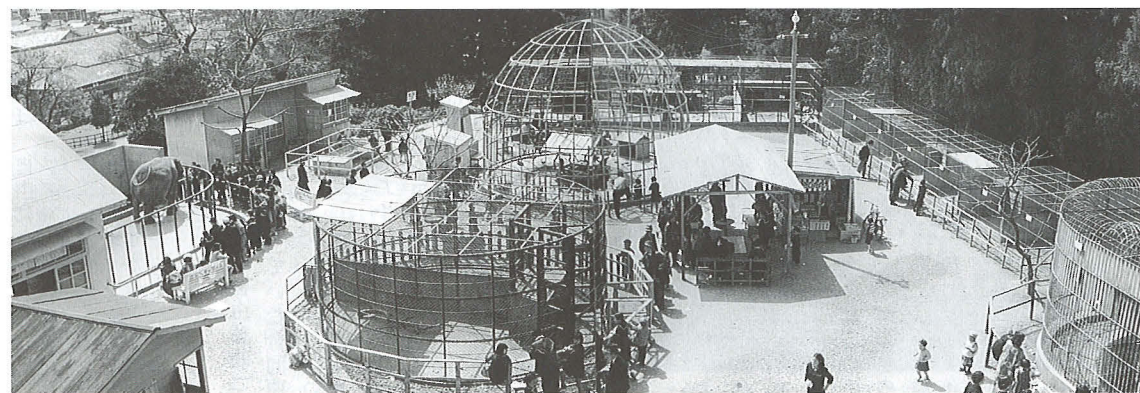
中西安男

一九八五年五月十一日の朝、シユバシコウ（ヨーロッパコウノトリ）夫婦の様子が何か違うことに気が付いた。そう言えば、もう抱卵日数はヒナの孵化日数に達していた。「フム、これは確認しなければ」と、地上三メートルにあるシユバシコウの巣の中が見える、ケージの隣に生えている大きなセンダンの木によじ登った。しかし、親鳥が巣に座っているの、中の様子が見えない。しばらく木の上で待つと、ほんの少し親鳥が腰を上げた。すかさず、双眼鏡で覗く。すると、親鳥の柔らかい羽毛に守られていた、かわいひなの姿が目に入った。申しわけ程度に生えている白い綿毛に包まれた、見るからにひ弱そうなヒナの誕生である。しかし、ヒナはまだ一羽のようである。これから孵化するであろう卵が四コ、そのヒナのそばにあった。ヒナの孵化を確認すると、スルスル（本当は高所恐怖症なので、おっかなびつくり）とセンダンから降りた。

はわずか四十平方メートルしかない飼育舎で繁殖したのである。これは画期的な記録であり、大スクープである。高知城の西にあった市立動物園、「汚い、狭い、動物がいない」と言われ、本当にネコならぬネズミの額ほどしかない小さな動物園で、我々の日々の努力がこの成功を勝ち取ったのである。

二日後、もう一羽のヒナが孵化し、ヒナは二羽となったが、しかし、残念ながらその他の卵は孵化しなかった。それでも二羽孵化すれば良しとしたものである。さて、これが大変である。二羽のヒナが無事に成長するかが最大の難関であったが、私達の心配をよそに二羽のヒナはスクスクと成長していった。とにかく夫婦の仲が良い。卵を産む前の段階から、夫婦は協力して小枝やワラをせっせと巣をかける場所に運び、いかに座り心地の良さそうな巣を作った。卵を産み落とすと、今度も夫婦の協力で卵を交替で抱くのだが、餌の時間となると、片方が餌を十分に食べてから巣に戻り、卵を抱くのを交替するというシーンが毎日続いた。

当然、そうした夫婦の共同作業で孵化した愛の結晶であるヒナの世話も、これもまた素晴らしいコンビネーションで行われていた。孵化したば



高知城の西にあった高知市立動物園（写真は昭和27年頃のもの）

かりのヒナは、体重がわずか六十グラムほどしかなく、親の長い足に比べてヒナの足は付いているだけという代物であり、わずかに首を少し上げる程度の運動しかできない状態である。そうしたひ弱いヒナを育てる

のだから、親鳥のきめ細かい愛情と技術には敬服する。最初は、親が食べたほとんど消化したような物を、親鳥が優しく吐きもどしてヒナに与える。大きくなるにしたがい、消化した物から消化されていない物へと変化していくのだ。

ヒナの成長は早く、



ふ化後7日目のヒナ

生後二週間もすると顔や姿がコウノトリらしくなり、いっちょ前にクチバシを天に向けて、クラッタリングと呼ばれるクチバシを鳴らす行動が見られる。親だと「カタカタカタカタ」と音がするのだが、ヒナのクチバシは軟らかいために、「スカスカスカ」といったような音しかしない。生後七十日を経過すると巣立ちが近く、体格はすでに親と同じ大きさになっている。違うのは、親の鮮やかな赤いクチバシに比べ、ヒナのクチバシは黒く、足も淡いピンクのよくな色をしている。



ふ化後40日目のヒナと親（左上・クチバシの赤いのが親）

巣立ちが近いため、ヒナたちはしきりに巣の上で羽ばたきの練習に余念がない。

生後七十七日目、巣立ちは突然起こった。その瞬間を見ることはできなかったが、気が付くとヒナが地上に降り立っていた。ここまでくるともう心配はない。孵化した時はわずか六十グラムしかなかったヒナが、翼を広げると二メートル近くの大きさに育つのである。驚異的とも言える成長の仕方である。

私はこうした動物たちの子育てを、旧市立動物園から現在のわんぱくこうちアニマルランドまで数多く観察してきた。そうした経験を今回か

ら六回に分けて紹介していきたいと思う。動物の子育ては実におもしろく、種ごとに練り上げられる子育ての手法に、時には舌を巻き、驚き、感心し、不思議な行動に戸惑いを覚えたりする。動物園という世界で野生と同じように子育てをするということは、簡単そうであるに、実は難しいものである。時には飼育していること自体が障害になる場合もあるのだが、我々動物園人の夢は、いかなる動物も野生と同じように子孫を残せるようにすることだ。

（なかにしやすお・わんぱくこうち・アニマルランド）

土佐考古通信 (6)

山本 哲也

歩けオロジ

秋風がさわやかな清涼感をもたらすこの季節は、八月に稲の収穫が終わった田地で、地下に埋もれた文化財の発掘調査が本格的に始動する時期でもある。炎天下のなか、したたる大粒の汗に悩まされていた頃に比べると、何かに解放されたようなホッとした気分になり、一年中この季節で調査ができれば、などと思ってみたりする。3K（色が黒くなる・作業服がいつも汚くなる・危険な作業を伴う）の現地調査に年中どっぶりとつかっていても、やはり調査に適宜な季節の到来は嬉しい。

日々汗と泥もつれを友達にしながらも、県下の各地で着々と調査が進められている。時として貴重な遺物の出土や、重要な遺構に出くわすとそれまでの疲れがうそのようにどこかへ飛んでいき、3Kの意識も薄ら

いで、いつのまにか完全に忘れてしまっている。やはり、心のどこかに調査を行っている遺跡で新しい発見と逢える期待感が眠っているようだ。

高知県下では、約二千六百余所の遺跡の所在が知られている。これらの遺跡は、偶然に見えられたり、発掘調査等で確認されたものが含まれるが、その多くは分布調査などの現地踏査によって、田・畑の表面に散布している土器・石器などの破片の採集が行われたことから地下に遺跡が存在していることが知られたものである。遺跡に関する情報の大半は、遺跡を探して野や山を歩くことから得られている。これからの季節は、雑草が次第に枯れてくるため、山林・田・畑での遺跡の分布調査が比較的容易に行えるようになる。

こうして、秋からは発掘調査や遺跡分布調査の件数が増加していく。

県下で行われている調査の大部分は、開発事業等の施行に伴う記録保存のための発掘調査である。遺跡の調査で記録化されれば、後は工事によって破壊されてしまう運命が待っている。今秋も数多くの遺跡の一部が、大地から永久に削りとられてしまうと思うと、何となく悲しい気持ちになる。遺跡から得られた情報は、発掘調査報告書として公開されるが、現地で出土した土器や石器などはいったいどこへ行くのか。その多くは遺物整理後に、収蔵庫や倉庫の片隅にコンテナ積みされ、次の調査研究資料として利用されるまで再び長い眠りにつくことになる。調査された遺跡も、多くは道路や建物敷きとなり、遺跡表示板がなければ、そこに遺跡が存在していたことに気づくことも少ない。

遺跡を訪ねて野山を歩きまわった結果が、発掘調査後に遺跡がなくなることと続くすれば、それは少しむなし道程でもある。すくなくとも調査もされず遺跡が破壊されてしまふことよりはましかと、自己暗示をかけてみたりもするが、やはり新しく発見された遺跡はせめて開発の手から逃れて、永久に保存されることを望まれるのである。

遺跡は、私達の祖先が残した貴重な

な文化遺産である。これを将来に継承し、活用を図ることは現代に生活する我々にとって、身近な課題の一つである。記録保存だけに満足することなく、発掘調査後に出土した遺物や検出された遺構が地域の文化財として多に活用されることになれば、今以上に、文化財が日常生活の一部として還元されてくるのではないかと考える。保存のための遺跡の文化財指定（史跡指定）なども、さらに増加することが望まれる。

高知市の秦支所では、支所の敷地が白鳳時代に創建された秦泉寺跡の一面に該当することもあり、支所入口のコナリーに説明板とともに出土遺物（瓦類と土器）の一部が展示されている。地域住民の方々の往来が多い場所に、地域の文化財と住民の方々の関心をつなぐ接点として大変意義深いことであると考えると、市民との対話を重視した意気込みが伝わってくるようでもある。

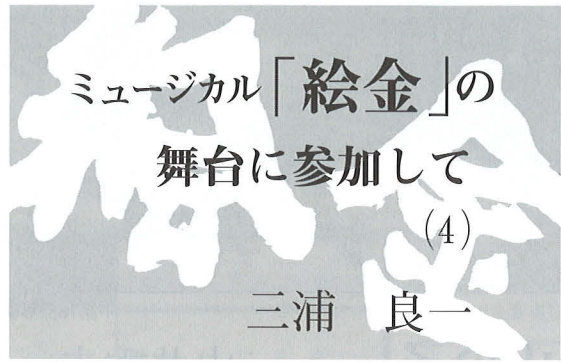
遺跡との対話は、まず野や山を歩くことから始まるものと考え。秋の到来は歩けオロジ（アーケオロジ・考古学）への入口にも通じているのである。

（完）
やまもとつや・高知県埋蔵文化財センター

◇台本が配布された日は、ワツという喚声が挙がりました。実際のところ「絵金」という人物を知ったのは初めてという者も多く、どんな物語りが展開するのか、まったく分からなかったのです。プロローグから九景まで、挿入歌二十二曲、登場人物だけでも四百人を越えるという大作は、帆足先生が長年あたためて居られた構想を一年前、日高の稽古場へ籠って、一気に書き上げられたのだそうです。

「作品のテーマは、作者のメッセージは」と固唾をのんで見上げていたのですが、特段のアピールは無く、この日も早口言葉の練習などで終わりました。あえて問えば、「テーマなどはそれぞれの人の受け取り様だ」というのがシャイな先生の反応だったのかも知れませんが、残念でした。少なくとも、「絵金」という人間について、その「絵」についてくらは、こうした機会に熟っぽく語って頂きたかったのです。やはり形を創り上げていくには、内容の確かさが必要なはず、内から込み上げて来るものを育てるには、識者を囲むなど「絵金」を、そして「台本」を学び合う機会も欲しかったと思います。

◇五月九日はキャスト発表の日で



した。TVカメラも入って場内はハイになりました。指名された主役級の六名は、みんな素人の若者でした。接してきた限りでは、台詞は棒読みだし、表情が特に豊かだとも見えないう只？の人ばかり、何を根拠にと思いましたが、次第に「素材の良さ」が見えてきました。

休日返上の特訓もあったようですが、日一日と、その輝きは増していききました。それぞれに、いつの間にか、スターの華やかさまで身に付けていったのです。演出家の、「素材を見抜いた眼識はさすが」という以外ありませんでした。

◇レッスン会場は二つの小学校体育館がメインとなりましたが、日高村、春野町、そして野市町まで出掛け、合宿を含んだ稽古が続きしました。昼間の特別レッスン日が入るようになると、会場の確保も大変だったと思います。当日も設営から後始末のモップ掛けまで、裏方の作業は休む暇なしだったようです。

企画、連絡、記録、宣伝、営業、当日の世話役等、制作という名の事務局を担当された高知市文化振興事業団の大家さん、田内さんお二人のご苦労は、想像以上のものだったでしょう。

責任者を決め、班を組織し、自主的な取り組みを目指していたようですが、結局は事務局任せになり、協力はごく一部のボランティア活動に終わったのが実態でした。

一つの文化運動としてみた場合、当初から、もつときめ細かく、主体性を引き出せるような体制作りを進めるべきではなかったかと思えます。舞台を仕上げる事が何よりではあつたのですが、もつと横の繋がりを重視し、自然発生的なものでない仲間発見のシステムと運営が必要ではなかったでしょうか。レク活動とか、主役クラスのみではない全団員を集めての交流などが企画されていけば、運動の輪はもつと充実したと思うの

です。

◇九月からは通し稽古が始まり、リハーサル終了後は、歌、踊り、演技、それぞれの先生からのダメ出しが、時には一時間近くも続きました。出番の少ない私は、片隅で座り込み、ひたすら待つという時間が大半でしたが、なるべく欠席しないようにしました。顔を揃えることも役の一つと意識しました。年寄りが頑張れば通じるものもある、と思ったのですが、うっとうしい存在だったかも知れません。とかく体の動きが鈍ってくる、口先ばかり達者になりがちだからです。

なお出席率については、後日、驚かされた事がありました。公演までには定例レッスンだけでも六十回、臨時、特別を加えれば実に百回近くの練習日があったと思うのですが、絵金を演じた大石君を筆頭に、皆勤という人が五名もいたのです。仕事をしながら、学校に通いながら、十カ月間に一回の休みも取らずレッスンを続けたというのです。それだけでも並みの努力では無かったです。事務局から、その報告を聞いた時には、全員が、痛いほどの拍手を送ったことでした。

(つづく)



散歩の途中で

近世土佐の最大の政治家といわれる野中兼山の墓は、筆山東南側の高見山にある。高知市の史跡に指定されている。この墓地への登り口近くが筆山トンネルの東口にあたっている。そのため、東口の上の部分が「兼山公園」として整備され、東屋ができ水場もある。かなり大きめの時計が遠くからも見える形で立てられているが、「時間を守れ、大切にせよ」との先人の教えと解釈すべきか。

風俗

鳥の目で

最近オープンした高層ビルの最上階から、高知の街を見た。百メートルに近い上空から眺める風景は、知らない場所ではないのに、新鮮である。街の形状、緑の分布、建物の集積状況…街の全貌が眼下に広がる。そのイメージは、私の場合—透明な輝き、明るい光に包まれた街—であった。眩しい陽光が惜しみなくそそがれる中、青く連なる山脈に囲まれて無数の家々が街を埋める、その中心を水面をきらめかせて鏡川が走る。部分部分に焦点を移していくと、特徴ある構造物は、そのデザイン、ポリウムなどの全体との調和も慮られて、なかなか

おもしろい。ここでは、広告物から洗濯物に至るまでの日常的狼狽な景観をすっかりカットして「全体空間」というものを、視覚的にも心理的にも感じることができる。距離をおいてモノを見る作用には、客観的感覚をよびさまされるような爽快感がある。気流に身をまかせ、眼下を一望して中空を漂う鳥の眼を、時には借りてみるのがいい。その時、こころの翼も軽やかにはばたいていく街でありたい。高層化は今後さらに進むだろうが、グランドレベルの良環境が整えられてこそ、上空からの眺めも居心地も快適になる。さて、二十一世紀末の人々は、どれほどの高さからどんな街を眺めることになるだろう。(翠)

市民フロアのご利用を 展示や会議に最適！

広さ・内装 96㎡壁面布クロス張り、スポットライト完備

所在地 高知市はりまや町一―五―一
デンテツターミナルビル5F

お申し込み
(助)高知市文化振興
事業団
☎73―4365

清流を子らへ

—21世紀に残したい鏡川—

高知河川環境研究会編
A5判・並製本122頁・本体価格1,000円

時代とともに急速にその姿をかえる鏡川。その変貌ぶりを憂い、何とか清流を復活させ次代の子どもたちに残したいと研究会メンバーがおくる熱いメッセージ。

※市内主要書店、又は当事業団でお求め下さい。

高知の高齢者と保健福祉

井本正人・真田順子・藤岡純一 編
A5判・並製本112頁・本体価格1,000円

高知県内における高齢者の保健福祉について、実態とニーズを調査し、具体的な政策提言を行う。

※市内主要書店、又は当事業団でお求め下さい。

賛助会員募集中!!

会費 年額 2,000円

特典 ① 機関誌「文化高知」を年6回お手元にお届けします。
② 事業団発行の出版物の10%割引(一部例外あり)
③ 主催事業や刊行物の案内(マスコミ利用の場合あり)

〔※上記特典は申し込みいただいた日から1カ年有効〕

お申し込み ①郵便振替②現金書留③直接事業団へ…
いずれの方法でもけっこうです。



第13回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

高知を撮る

山の子 中井秀夫

帯屋町は原宿の縮図である。原宿の若者ファッションは旬日を経ずして、帯屋町にあふれる。右を向いても、左を見ても、白いルーズ・ソックスの女生徒たち。学校で、少しでも突出した行動をとると、村八分、イジメの生け贄になると聞く。

一斉にへ右へ做え、は、彼女らの保身術も兼ねているのであろうか？

かと思つと、茶、金、黄、青、紫に髪を染めた若者の大洪水。腰の鎖にジャラジャラと鍵などぶらさげ、エア・マックス、ヒール・パンプス、ミュールと称する突っ掛け、赤い鼻緒の下駄、なにやら不気味な蛇柄のはなおの雪駄……

若者たちの足もとを眺めているだけでも、流行は猫の目のようにくるくる変わる。

暮打ち仲間の地口に、「カッタ、カッタ(勝った、勝った)と下駄の音」というのがある。

形勢有利な方が、沈黙考中の相手を冷やかに常套句である。

カタ型・型・型…

風俗歳時記

帯屋町を、下駄履きで、カタ、カタ、カタ……得意満面で闊歩する娘たちを眺めていて、暮敵の勝ち誇ったような顔を想い出した。

そう言えば、昔は、反つくり返つて、大道を押し歩く連中を、「雪駄の土用干し」と嘲つた。

雪駄を干すと反り返るからである。

洋服に下駄という、この異様な取り合わせは、その道の専門家によると、高名なイギリスのデザイナーが創案した、捻りと洒落つ気のきいたジャポネズリ(日本趣味)、シノワズリ(中国趣味)なのだといふ。

原宿族もまた、欧米の由緒正しい(?)ファッションに、逸早く追隨していたのである。

帯屋町のご二統は、急げや急げと、そのあとを追っているのである。それにしても、この見事な画一化、没個性の氾濫はどうだろう。

なにごとにつけても、横並び・他人志向を得意とする親たちの雛型を見る想いがする。

(朴)



カテリーナ古楽合奏団

古典シリーズⅣ 中世・ルネサンス時代の音楽

■ 1997年9月16日(火)

午後7時開演(6時30分開場)

■ 高知県立県民文化ホール・グリーン 全席自由

■ 入場料：前売り 一般3,000円 大学生以下2,500円

(当日は各500円増)

主催：カテリーナ実行委員会

(財)高知市文化振興事業団

映画「絵の中のほくの村」の音楽を担当し、その独特の音楽世界によって多くの人々を魅了した「カテリーナ古楽合奏団」。30種にもおよぶ古楽器から奏でられる人間的な音色は、西洋音楽でありながらその枠を軽々と飛び越え、「いま一番新しい音楽」として、高い評価をうけています。

10月の海外公演を前にした高知公演、ぜひその素晴らしい音色をお聴きください。

◆ 曲目 ◆

- ドゥクチャア(イギリス 13世紀 作者不詳)
- トリスタン嘆き(イタリア 14世紀 作者不詳)
- エスタンビー(イギリス 13世紀 作者不詳)
- 五月の日々(フランス 12世紀Rウエケラス)
- ブルゴーニユのブランル
- (フランドル 16世紀 Cジヨルベーズ 他)

※託児室を設けます。事前にご連絡ください。

【お問い合わせ・チケット予約】
(財)高知市文化振興事業団 ☎08888・73・4365



文化セミナー'97

◆第1回 10月2日(木) 講師：小浜逸郎氏 [批評家]

テーマ 「オウム」以降の私たちの生き方

『オウムと全共闘』等の著者で、家族論・学校論を中心に活発な評論活動を展開している小浜さん。オウム事件が突きつけた三つの課題から現代社会を考えます。

◆第2回 10月16日(木) 講師：佐倉 統氏 [横浜国立大学経営学部助教授]

テーマ 人工生命から人間社会へ—複雑系の進化論

いま、科学から経済まで幅広い分野で注目を集めている“複雑系”を読み解くキーワードとしての「人工生命」を解説し、科学と人間社会の関わりを考えます。

◆第3回 10月23日(木) 講師：向山昌子氏 [コピーライター]

テーマ 隣人たちの食卓—アジアでごはんを食べてきた

アジアの各国を1年間にわたり旅し、その国の普通のごはんを食べてきた向山さん。隣人たちのごはんを、それを通して見える日本の食卓について話して頂きます。

各回とも午後6時30分から高知共済会館3階で開催(約2時間)。受講料500円、定員は100名です。お申し込みは文化振興事業団 文化セミナーの係 (Tel&Fax73-4365) まで、電話・Fax・葉書のいずれかでお願ひします。